

除夜の鐘 中原中也

除夜の鐘は暗い遠い空で鳴る。

千万年も、古びた夜の空気を顫(ふる)わし、

除夜の鐘は暗い遠い空で鳴る。

それは寺院の森の霧(きり)った空……

そのあたりで鳴って、そしてそこから響いて来る。

それは寺院の森の霧った空……

その時子供は父母の膝下(ひざもと)で蕎麦(そば)を食うべ、

その時銀座はいっぱいの人出、浅草もいっぱいの人出、

その時子供は父母の膝下で蕎麦を食うべ。

その時銀座はいっぱいの人出、浅草もいっぱいの人出。

その時囚人は、どんな心持だろう、どんな心持だろう、

その時銀座はいっぱいの人出、浅草もいっぱいの人出。

除夜の鐘は暗い遠い空で鳴る。

千万年も、古びた夜の空気を顫(ふる)わし、

除夜の鐘は暗い遠い空で鳴る。

新年の手紙(その一) 田村隆一

きみに

悪が想像できるなら善なる心の持主だ

悪には悪を想像する力がない

悪は巨大な「数」にすぎない

材木座光明寺の除夜の鐘をきいてから

海岸に出てみたまえ すばらしい干潮！

沖にむかつてどこまでも歩いて行くのだ そして

ひたすら少数の者たちのために手紙を書くがいい

大晦日と元日 金子みすゞ

兄さまは掛取り、

母さまはお飾り、

わたしはお歳暮。

町じゆうに人が急いで、

町じゆうにお日があたって、

町じゆうになにか光って。

うす水いろの空の上、

とんび
鳶は静かに輪を描^かいてた。

兄さまは紋付き、

母さまもよそゆき、

わたしもたもの。

町じゆうに人があそんで、

町じゆうに松が立ってて、

町じゆうに霰が散ってて。

うす墨いろの空の上、

鳶は大きく輪をかいてた。

夢売り 金子みすゞ

年のはじめに

夢売りは、

よい初夢を

売りにくる。

たからの船に

山のよう、

よい初夢を

積んでくる。

そしてやさしい

夢売りは、

夢の買えない

うら町の、

さびしい子等らの

ところへも、

だまって夢を

おこしゆく。

元旦 金子みすゞ

みんなで双六しましょうと、
みんなの御用のすむ時を、
待っているのは寂しいな。

遠い遠い原っぱで
男の子たちの聲がする。

大戸卸して屏風をたてて、
暗い暗いうちのなか、
お山のようにさみしいな。

凍てた表にからころと
さむい足駄の音がする。

昨日は夜を待ちくたびれて、
今朝も跳ね跳ねお着物を着たが、
お正月とはさみしいものよ。

姉さん学校へ行っちゃって
母さん御用がまだすまぬ。